

明治十一年九月十二日出版

北陸
東海
御巡幸日誌
第一號

明治十一年第八月東京御發着より
同 第九月上田驛御着筆まで

定價三錢五厘

明治十一年九月九日御届

編輯兼出版人

寺本彌太郎

第五大區「一小區」
淺草聖三ヶ町廿一番地

賣

淺草駒形町

兒玉又七

同馬道町三丁目

兒玉彌七

裏神保町

中村清兵衛

所

小舟町三丁目

熊谷庄七

特44
720

(日 十 三 月 八)

御巡幸日誌

寺本彌太郎編輯

明治十一年八月三十日の豫て御布告の通り御發轍にて供奉の方々岩倉大臣大隈參議を始めとして勅奏任有位華族の面々參内あり謁見を仰付られ朝第八時を報ゆる頃兩儀整ひたる旨の奏上より御車寄より御馬車を奉る御陪乗より佐々木一等侍補仰付られ引續ひて兩皇后なる御見送りとして御輦を召せられ御門外まで候らせ玉ふとさきこゝに整列したる陸軍の樂隊の一齊に樂を奏し御輦の眞先より警視官數十人騎馬にて先導し奉り次は儀仗兵御旗次は儀仗兵二小隊四列を成して前後左右より御輦を従ひ奉り次

御巡幸日誌

一兩皇后の御筆續ひて跡又續りその次に供奉並び奉
送官員の馬車數十輛陸續として敷ふるに違あらば此日や
天氣晴明なれば殊更府下の老若男女の龍顔を拜し奉らば
やど萬世橋より板橋の間まで路次は充滿して錐を立べき
地もなく家々よりの日の丸の國旗を掲げ道を拂ひ水を撲ち
今ぞ通御を待奉る斯く御筆の通御筋の假皇居より四ツ谷
御門まで近衛歩兵衛衛門より半瀧御門より萬世橋まで
鎮台の諸隊よて警衛し奉る頃て萬世橋に至らせ玉へば爰
は扣へたる海軍の樂隊樂を奏し十時五分板橋の御小休飯
田春敬のわさよ着御ましまし伊藤參議の爰てより此所よ

待受られ御先よ立て玉座は導き奉る此家乃主人飯田春敬
の地の地よ生産たる稻粟などの穀物類を天覽は備へ奉
り午の供御をめさせ正午十二時同所を御發筆の調度と、
のへせられ皇后宮よの玄關よて御別れを告げさせ玉ひま
た奉送の面よの門の内外は列して見送り奉る 兩皇后の
宮よの暫くよの所よ御休息ありて十二時三十分は還啓を
仰出され引續きて諸官員もそれくは歸京せりまた供奉
の景況も少しく替りて楠本知事の千田大書記官と、もよ
浦和の行在所まで隨ひ奉る此驛の學校生徒の驛乃出口よ
打揃ひく御筆を拜さ飯田春敬への御茶料として 聖上よ

(日一十三月八)

り金五十圓兩皇后宮よりハ五十圓を賜へりハの他供奉
 並奉送官員の休息所へも十五圓十圓五圓とられへ
 賜えりまた奉送の皇族大臣參議の馬車四十疋の飼養料と
 して金一圓四十三錢を宮内省より該區務所へ下け渡され
 たり却説も翌三十一日の朝は浦和驛の行在所(師範學校)ハ御
 策をとめ玉ひ此地の勸業博物館ならびハ熊谷裁判所支
 廳等を御巡覽あらせられたり此博物館ハ公園地ハ設け
 あり出品まハ物産の數も多分ハ陳列しとるハ諸工業の進
 歩の程も見へ殊更縣官の盡力されしもまハ著し爰ハ思ひ
 かけぬ珍事のありハ公園地へ臨御の時直訴とをばりく

一通の書付を捧げて突然走り近づく者ありハ何者なる
 ぞと警固の巡查が引捕へ問ひ糺せば千葉縣下の者にて永
 の年月數度の裁判を仰ぎとる小金ヶ原開墾一件の歎願人
 數人の惣代となりて恐れ多くも此事ハ及びとるなりと云
 ふハ演述せしどハ聖上ハ午前十時頃もとの行在所へ
 還行ありハ牛御膳を召せられ十二時浦和を御發轅ありハ
 大宮ハ着御とまハ武藏國一の宮氷川の神社へ御參拜あり
 元來此の御社の驛の北東の森の中ハあり一の鳥居の外ハ
 池ありハ橋を架渡せるハ御輦ハ通トがとりけハ東の
 堤をめぐりハ進ませ玉ハ兼ハ通御の路次景色よき所ハ寫

(日一月九)

取らしめんとめ今回供奉を命せられたる油繪師の五姓
田義松ハ此池の堤を御社へと渡らせ賜ふ様子を寫し取り
たり爰ハ漸時移り四時ハ近き頃主上ハ上尾をさぎて
桶川驛の行在所(府川秀之助方)ハ着せ賜ふ狂明レバ九月の
一日となり例刻より一時後れて八時ハ桶川を御發轅あり
午後二時半熊谷驛の行在所(本町一丁目竹井耕一郎方)ハ
着せ賜ふ此驛ハ名ある土地のゆゑハや學校の生徒等ハ至
るまで御道筋の左右ハ不み御轡を迎へ奉り拜觀の人々も
いと多く町々の様子もさして東京ハ替るまどなく家々の
旭の國旗を揚げ軒ハならぶる毬燈ハさなぐり祭りハ異な

らげ目を驚かざりなりまた此行在所なる竹井耕一郎の
宅ハ奇物あり先づ一のツハ庭ハさあたる大きな土偶
人なりこの昨年中此驛ハ程近き中條村といへる地より堀
出したる者とかゆまた高さ三尺斗りの馬(金屬)木類ハ未
ダ詳らかならばあり千年余を経るものと見ゆ玉座と定め
たる一室ハハ明人陳眉公の書幅をかけ茶室ハハ種々の珍
器を飾り付け明清の書畫をも數多出して天覽ハ供へま
た同家の主人ハじめ建設けたる私立學校折廻學社の教師
大竹政正ハ編たる皇統歌を此驛の書家小泉香應ハ書しめ
たる者と同社生徒の詩三十餘首をも奉りまた熊谷寺の僧

(日二月九)

が彼の熊谷直實の遺物(香爐珠數鞍轡など)は縁記を添へて天覽に供へたてまつり殊のほろ 叙慮よかなむとど
 斯く翌二日の午前七時の御發輦にて深谷驛へ輦らせ賜ふ
 此驛の町の兩側は青葉のつきとる竹をたぐ注連繩をのり
 軒下にて白き幣と赤き毬燈をかけいと目ざましき有様な
 り此とあるよての杉田千衛方を御小休とせられ岡部村よ
 り普濟寺村へ渡らせ賜ふよ學校生徒の奉迎せる極て多く
 源勝寺といふ寺よく暫時御休息ありこの時同寺よ古く持
 傳へたる柳宗元の畫を 天覽よ供ふ此畫はその古昔鉢形
 の城主北條氏邦が贈りしものよて圖の男女の仙人を畫き

(日三月九)

至つて古雅なるよし元來普濟寺の岡部の忠澄が建立せし
 寺なりといひ傳へ同寺よ忠澄夫婦の木像などあり十二
 時すぎ本庄驛の行在所(田村左總治方)へ成らせられ御晝食
 を濟せられ一時御發輦となりし町の出口よ在る製絲所
 にて年の頃十七八の娘が三十人余居並びて絲を繰り輸出
 糸と唱ふるにぞ杉宮内大輔の手よ取て見るに随分精良
 なる品なればみれを御輦の内よ奉りしよ 主上御覽あり
 叙感淺からば猶勉勵せよとて金十圓下賜り御輦の
 早くも新町驛の行在所へ看せ賜ふ翌三日の新町驛の行在
 所を御發輦おらせられ層糸紡績所へ成らせられ前島少輔

門外より奉迎して樓上へ先導し奉る男女の職工のひとく
 場外より立ならびて敬禮せりと、は漸御休息ありて後ち層
 藪の表たて場をはじり糸線所等御覽あり掛り一同へ御賞
 與ありて九時頃御發轅になり倉賀野行在所(須賀喜太郎方)
 も暫時よて立せ玉ひ高崎の行在所(區務所)へ着御まじませ
 十時頃なり此の土地の鎮臺分營兵の二大隊よて驛の
 口よ整列し奉迎の禮をなし十二時半前橋へ向け御發轅
 になり刀禰川の船橋の御板輿よて渡らせられ三時過ぎ此
 の土地の行在所(生糸改所)へ着御せたるもふ近ごろ高崎も殊
 の外賑はしく前橋の繁華のまたひとよて拜觀の人々

(日四月九)

多きこと高崎よ倍たり翌四日の午前七時縣廳衛生局師
 範學校ならびに學校中假よ設けたる糸線場へ臨御となり
 工女凡百人をり今日を晴衣と新しく仕立たる衣類を着
 各粧ほひよる出立よ器械運轉の動作をなよる容子
 目を驚かす斗りなりまよ縣廳よて第一觀業場へ古器數
 種を陳列し行在所よて和漢の古書畫數幅を天覽よ供へ
 午後一時前橋を御發轅ありて三時過ぎ高崎へ還御もとの
 行在所へ成りせらる此夜の煙花數本を向河原よ打あげて
 天覽に供へむとのよて己よ用意も整ひたりしが打續き
 する雨天なりしかば志を果さば如何よも本意なかり

(日五月九)

なるべし爰又贈四位高山彦九郎氏の孫高山守四郎の
今回の御巡行の際に召出されし守四郎の今年十四年
親石四郎の八年前死去し守四郎の姉二人と母と自己
都合四人ぐりなるが數代所有の田地畑も追々失ひ
近ごろ活計至く困難しつひは細谷村を去りて今の桐生の
土地に住居して姉二人の機織も雇はれなごして漸く其日
を送る体聞もいたましき有様なり元來高山氏の本家の蓮
沼海平とよばれ五六十石の田地を所持する農家にて守四
郎はその附籍となりてあるよし今回の御巡幸にて守四郎
はしめ八十年以上の老人へのそれく賜物ありしるよし

却説も翌五日の午前七時雨の前日より降り續き止むま
なき折しも行在所を出させ賜ひ高崎の鎮臺營所へ臨御あ
らせられ營中を悉皆御巡覽の後操練をも見そなへし賜ひ
畢て行在所へ還御まなご御中食を濟せられたり十二時頃高
崎を御發轡あり道の泥濘はさながら沼の如くなれど拜觀
人學校生徒などの例の如く夥しくいづ板鼻驛より安中驛
へ進ませ賜ふ折から神道修成派と記ししる白き旗をたて
し神職らしき者三十人はかり出で來りて御轎を拜し奉り
夫より十町はかり進ませ賜ひ原市といふ土地にて御小休
ありこのとき同所の山本有所といへる人左の一首を詠く

御巡幸日記

七

奉れり「香の」き菊のみるげを千早振かひな川原に
がみまつる是より碓氷川のほとり枇杷が窪わたり
は新開道多く連日の雨は殊さら路次あしく御輦の通御む
づかうければ兼てみ、は待奉りたる人足ども御馬車より力
を添へて通御を進め奉りゆがて松井田驛の行在所(警察所)
へ着せ賜ふ此土地よて四五日以前とらへたる雀を天覽よ
供へたれば殊の外御意よいりいと珍らうとて止めおるせ
賜ひいどぞ爰よまた一ツの不審き事ありしの高崎御駐輦
中何者よや忽ち拘引されたるより後よ思ひ出せば桶川熊
ヶ谷の兩驛よて文進社員なりといふもの新聞記者と名

(日六月九)

乗り各社員の旅宿へ泊らんとせしを素より入るべき者な
ふねば退けて寄つけざりしが何れの宿驛も斯様なる不
都合ありしよまゝに逐よ事の爰よ及びしものう道中の探偵
嚴密よして容易よ偽者の入るふさざるなりと翌六日午前
七時松井田驛の行在所を御輦あり此日の殊に空うち晴
て四方の景色も見渡さる長野縣令の前夜よりこの處よ出
迎へれ御先導なしたりしは此邊の道も險阻たて一歩く
ど爪先き上りよ高くなり漸碓氷峠よ近づき坂本驛よて御
小休あり爰よりひまた一層登り坂よて雨後の殊さら路次
も悪しく聖上の御板輿よて渡らせ賜ひ此坂の上より西

御巡幸日記

八

南を見下せば輕井澤の驛をその足下に見渡しそれより遙
く西の方を望めば一ツの離れ山を見また佐久郡の山も目
の前より連なりて恰も箱庭を見るが如くまた此坂を少し下
りたる處より淺間の嶺を眺むれど今日ハ殊さら雲深く
て全体を見ぬまた坂を下り盡して西の方より歩むと十四五
丁よりして輕井澤なり午後一時頃此驛の行在所(佐藤織衛方)
より御晝食を召せられ午後二時御發轅ありて此處より御
轡より召せられ輕井澤より沓掛をさして輾らせ賜ふ輕井澤
より沓掛まへの間東の碓氷の山脈は續き北の淺間の山脚
より地形ハ余程高けれども自ら平坦なりまた此處は廣き

原野あり平遠よりして豊草繁茂り人家ハ至り稀なり然れど
近頃ハ原の中を少しづつ、開墾して蕎麥稗などの植付あり
しが中々よく出来たるを見れば地味も左程悪からず水の
廻りもよき様子なり沓掛ハ今長倉と改稱し此邊ハ人家も
あり田畑も少なからず拜觀人も此所より十八二十人
程づつ、羣り居たり何れを見ても山家そだち家居のさまも
いと貧しく衣服なども賤げよて所謂田父野人なるもの多
く借宿と云ふ邊より西ハ稍人里めきて艶なる娘も見へ又
ある家の軒下ハ社家と見へ十五人はかり生壁色の素袍を
着し扇子をならしつゝ、立居たる体古風よぞ見へさりける

夫より西の坂を登り結るとさるに廣き原わり此處よの
 四方より來りしと見へ三四百人の拜觀人も此處彼處よ立
 ち集り學校の生徒の何れも洋服を着揃へ道の北側よ並列
 して某校よと記したる旗十二三流を秋風よ翻し御通輦
 を待て一齊よ拜禮をたり夫より二三十町の間よ又段々よ
 爪先上りの道よて淺間山の南半腹とも云ふべき處よ登り
 また坂一ツを下りたる處の追分の驛なり此土地の坂の雨
 側より驛の入口まで錐を立べき透間もなく近村近郷より
 拜見よ出とる老若男女が充滿して我さきよ天顔を拜し奉
 つらんと押合たる体を見て供奉の某君の「淺間山麓の行幸

(日七月九)

けふぞと遠地みち人のあげくつどへると詠まれける御
 輦のち此處を過ぎさせ玉ひ今宵の追分驛の行在所(土屋
 一二方)へ着御あり日へえ西山よ傾くころ玉座よ着せ賜
 ら夜よ入りて諏訪神社の神寶そのほか數百年を経たる古
 器物ならびよ和漢の古書畫などまことの官内よる人民所
 有の珍奇品を多く集めて天覽よ備へ奉り翌七日の七
 時の御供ぞろひよて御發輦よなり馬瀬口村よる御小休み
 ありそれよ二十四五丁を、ませたまむ小諸驛の北の坂
 の左りなる唐松坂の上よる御野立あり此の所の目の前よ
 千曲川を見渡して風景もつともよく小諸驛の上田宇源次

方にて御晝食を召し午後一時ころ御發輦はつれんをらせられ此邊の景色よき處を御巡覽じゆんらんなすべく御小休おこやすみありりれより又御輦みくらを海野の方へ輾まらせ玉ふ此處のまゝ商家軒せうかを並べいと賑にぎひしまた大屋おほやと云ふ處もよき町なり 聖上てんしやうの岩下にて御小休ありこの邊の千曲川ちまがわの北は沿ふて西北は向へる道なり午後四時上田驛かみだの行在所あんざい（舊城ふるき内は新築しんき）とる學校へ御着輦みくらをらせられとり

記者曰上田驛より先きの第二号は掲載して廣覽くわんらんに備ふ

御巡幸日誌第壹号終

明治十一年九月廿七日出版

東海 北陸 御巡幸日誌 第二號

明治十一年第九月上田驛より

全禮まで

定價二錢五厘

明治十一年九月九日御届

編輯兼出版人

寺本彌太郎

第五大區十一小區
淺草聖天横町廿一番地

賣

淺草駒形町

兒玉又七

同馬道町三丁目

兒玉彌七

裏神保町

中村清兵衛

所

小舟町三丁目

熊谷庄七

御巡行日誌第二号

寺本彌太郎編輯

却説も上田驛の行在所の舊城内の學校にて三階作りなれ
 ば樓上の殊更見晴よくたや秋の半は近ければさへ渡る月
 の風景よく供奉の人との歌よと詩を作りあはし旅の心を
 慰められとり爰よまゝ上田の士族よて當時陸軍少尉を奉
 職せる懸山盛修といへる人あり昨年五月三十一日西南の
 軍よ肥後國久摩郡人吉の照岳よて兩股よ銃創を受け既よ
 危ふかりしが陸軍病院に入りて命を助かり當時歸郷療養
 中なりしが俄かよ此行在所へ召し拜謁を仰付られしかば

(日八月九)

盛修のよるみびは堪へず鴻恩の厚さを奉謝し祝辭一辭を
編みて大山陸軍少補は呈し且ツ今度の御巡行を祝し奉
れり翌八日上田驛より長野まへの御通御なれば道も少
く遠きゆへに例刻より一時早く午前六時の御發轅より上
田驛ならびよその近郷近村へ申すは及ばぬ木曾街道筋よ
り二三十里加多て拜見に出たる者多くその賑やかなるこ
と言語は盡しなく古來未嘗有なりと元來此邊の上田編
と云ふ織物なども出来生糸もある土地なれば随分うるを
ひ人家も至て立派にて拜見に出たる人々も賤しからず此
驛を西に出づれば町はづれの原にてみよも又拜觀の人

々羣衆せり東北より來りたる山脈の盡る所は大きな岩
山ありその下の千曲川なり川に沿ふて岩山の下を北は廻
る此處を鹽尻村といふ此邊にも村々より出たる拜見人多
くまた鼠と云ふ所ありまゝの間の宿にてチウ位の處なり
此處の瀧澤漸方にて御小休あり金井仲の條など云ふ村の
眞の北は向きて行く處なり九時坂木驛の宮原庄吉方にて
御小休あり此處の學校生徒は多く路傍おひみ御籠の通御
を待て拜禮せりこゝは憐れむべき一人の長持人足此處
の新町にて卒然打倒れりとの儘死しとりとまゝ坂木の入
口は村上義清が墓あり坂木を出て横吹と云ふ處より磯部

まて四百間餘の新道ありこれの元山腹ありしを千曲川
よ沿ふて平坦なる道を築きたるなり同日十時半ごろ下戸
倉へ御着筆ありて柳澤喜一郎うとよて御晝食をめし上ら
れりれより上田を出て千曲川は添ふて北は向ひ行けば人
家軒を並べ自うら町の体裁をなせり此戸倉驛も随分賑や
かよて學校の生徒の六百人も路傍に立並び拜禮を成とり
けるまた柏尾村への南朝の宗良親王の警塚と云ふものあり
りとは疑しき者なりと此處もはや十二時ごろ御立よて寂
詩村を過ぎ五十町ばかりよして屋代に至る爰よても梶崎
源左衛門かよとよ御小休あり此驛を出て、少子行けば千

曲川の俄は西より東に折たる處に出逢む此處の船橋を掛
けて御輦を渡り奉る然れど橋を渡らせ賜ぬまへ御野立あり
りしとき爰よて遙く川下を見渡り賜へば横田河原の古戦
場なり西の方の狭捨山よて景色もツともよし件の船橋を
渡らせ賜へば篠井驛なり此處の随分繁華の地よして拜觀
人も多く伊藤盛太郎方よて御小休あり此家の後の方へ即
ち川中島の古戰場よて今の著しとる桑田のみなれども謙
信が陣取せし妻女山も指點の間よりまた山本勘助が細
張せしと云ふ松代の城も僅か東北の方二十町をありの
隔たりなれば昔時の様を思ひ出であわれを添ゆる秋なる

べし 主上も程なく此處を御立よて今井今里氷鉋など
云ふ村を遇させ賜ひ丹波島よての柳澤むせ方よて御小休
あり丹波島を北に出れば犀川の西より來りて東よ去り千
曲川と合す此川の南の河原も拜觀人雲霞の如く羣聚し學
校生徒の洋服よて二行に並列し某校々と記したる旗幾
流れとなく川風も吹なびかせ教員への指令長官とも云ふべ
き身振りよて左手よ小旗を取り右手よ帽を脱ぎ御轡を見
て一齊に拜禮を爰にも船橋を架け御轡を渡り奉り此の河
原よ進みとり此處も拜觀人多くこれより長野縣廳まで
僅う二十町ばかりなれども唯道の兩側の拜觀人の多よて

錐を立るの地もなく午後四時半ころ漸くよて御泊りへ
着せ賜ひしが今宵善光寺前通りの賑ひの實は一方なふは
古今未曾有のことなりと
此日(八日)のまた大隈井上の兩參議が善光寺を見物よ參ら
れあるこの山寺の本堂下よの戒壇堂と唱へし一ツの洞あ
りて此處への決まり常よ人を入れざりしが兩參議のその
洞中を見物せんと入口のゆふなる處より穴の中へえいら
れよ真の暗穴なれば寺僧よ命し燈を持來るべしと云ひ
れしに此處への陽明の地にあふげ亡者の來り集る場所よ
らへば往昔より決して燈を入れしよと云々と云々演説

(日九月九)

れは兩公の何條さるゝとのあるべきとて又居り合せたる
長野縣令は申付け火を燈させて見廻られし凡そ十疊敷
はありの廣き土坑よて下よむしろを敷つらねてありしと
その日の道中へ上田より十里程の長き丁場なれば供奉
の人とも大きき勞れしよよまよ近藤芳樹先生供奉よて
捨山の麓を過るときすべなしや今宵なよをはよて
田毎の月を見んとれもへどと詠れしも暫時の旅の心を慰
めけり
斯て翌九日の午前第八時長野縣の行在所善光寺の大藏進
と云ふ別當所なりを御出門よて縣廳へ臨御あらせられ櫓

崎縣令御先導よて進ませ賜ふとき少書記官僚屬をひきか
て縣廳の門外に立ち迎へ奉る 聖上御轡を下り賜ひ先づ
便殿よ着御あらせられ夫より正廳よ入らせらる此時縣令
祝辭を奉りまた縣治事務の概略を奏上あり畢て 聖上の
玉座をはなれ賜む各課を御巡覽あり次で便殿の傍よ設け
たる管下の物産陳列場よ入らせられ一々御覽ありて再び
便殿よ入御し暫時御休息よて十時ころ縣廳の傍よ設立し
たる博物館を御通覽ありて製糸場へ臨御よなり夫より師
範學校よ裁判所支廳へ臨御あらせられ裁判所支廳の門外
よへ松本裁判所長並よ支廳長の代理某等よて迎へ奉る

聖上着御あらせられ松本裁判所長祝詞を奉り並に民刑勘
解一覽表を呈上せし此時 聖上親しく聞き召え午前十一時
頃行在所へ還御あらせらる拜觀の人々の此處彼處より集
り來り雲霞の如くは充滿せり凡てその處より來りし拜觀人
の氷内郡高井郡更科郡その外の所々在りし此度の御巡
幸を拜し奉らばやと善光寺詣ふを兼て孫よ娘と引連て
めいと腰よりわら巻を包みたる辨當を用意し二三日も前
より泊り掛け來りし者多ければ一方ならぬ騒ぎにて御
輦を拜せる有様の小諸上田邊の者よりの髪形より衣服の
様に至るまで餘ほど鄙びたりと見ゆるもの多しその日ま

九午後二時再び同所の行在所を御出門おて城山公園地へ
臨御あらせらる此地の餘ほど高さところよて近頃まで見
沙門堂のありしを取り拂ひて公園となし若し此度の御巡
幸も臨御あらせ玉はとて御休息所をも用意なしをきし
が幸ひは臨御あり四方の景色を眺望あらせられ一は叙
慮を慰め奉れり元來此處に至極高爽の地より水内埴科更
科高井を目下に見渡り犀川千曲川を始め川中島の古戰場
なども指點の間は在りて絶景云ふばかりなり折か午後
二時ころより此地の人民が御馳走とて花火を催ふし叙
覽も備へ奉る此花火の皇都もいまだ見ざる珍らしき花

火にて数種の色烟を發して雲間を現れ夫々の名あり殊
の外面白く 聖上も公園の假宮を御座まゝにて觀覽あら
せられたり惜むらくは三時ごろより雨降り出し烟花の火
も濕りと思わしからば拜觀も出たる人々も濕濡となり
宿所々々も引取る者も多ありける
斯てこの前日宮内省の或る官員方の戸倉驛より道を西の
田間より取り千曲川を渡りて信州の名所煥捨山を見物に行
あれしが今の人々の煥捨山と稱する處は更科山の半腹に在
る地狹く前の方より見れば後の山と一所となりて格別
の景色もなく殊に月を眺むるよは雲間を聳へたる山なら

やの古人の詠せし歌など合ふ苦もなし思ふよこれ昔
此處に住する山寺のえせ法師等が在り合せたる石は
縁起を付けて姥石など云ふ怪説を附會しする者なるべ
しまた田毎の月も近ごろの俳徧師どもが彼是と云ひえや
せども餘り古き歌ども見へず然れば實の煥捨山は今俗に
冠り着山と云ふ邊りよてあるべし元來此山の峯高く聳へ
立て形も奇なれば月の景色も定めて耳しうるべしこれ
また前日のことなりしが戸倉驛にて御晝食を召し上ぐら
れし折あら上鹽尻村の原昌言と云ふ者罷出て石笛を吹き
て天聽よ達し奉りしを今吾輩承るに去る六日の夜追分驛

の行在所にて天覽を備へたる古器物の内は天の石笛と
記しとる物ありしを御覽あらせられ是の如何なる發音す
る物よゆと御尋ねありしに供奉の方よりその持主を呼
び賜むしは折ぬし居合せざりしは付き猶そのことを仰せ
置れしゆゑ去る八日石笛の持主戸倉より來りその笛を吹く
御聴ま入れしこのみとなりぬれしついで供奉の或る人も
石笛の持主を尋ね合ひて其笛をも見また音をも聴きしは
昌言の此度の事實に意外の聖恩を蒙りしとて感泣は堪
へず石笛の由來を物語りし左の文は曰く
弘化丁未春我信震災ノ爲ニ山崩レ水湧キ災ノ及ブ所六

郡予國史ヲ按ズルニ光孝天皇仁和丁未信河六那此災ア
リ然シテ丁未三月廿四日ソノ支干ト月日ヲ同ウスコハ
ニ九百六十一年トス然レモ國史其六郡ノ地名ヲ載スル
ナシ予因テ其災ノ及ブ所自ラ山川ヲ跋渉シ戸隱山ニ詣
テ途中偶然ニ此笛ヲ拾ヒ得タリ爾後西京ニ上リ千種三
位有功卿ニ詣リ古ヘ天ノ磐笛アルヲ承リ再ヒ携テ上
京シ呈覽ス時ニ又タ樂家東儀多氏ニ質スニ律壹越ニ協
フ而シテ天磐笛ノ一ハ御室御所ニアル本朝事始ニ見ユ
其書少納言通憲ノ所撰ト云形胡笳ニ似タリ云々予ガ所
藏長ク手一束ニ過ズ又胡笳ニ似タリ其聲清亮ニシテ氣

息ノ後急ニ依テ律呂甲乙ノ音アリソノ甲ノ音ニ至テハ
石ヲ裂クガ如ク實ニ梁塵ヲ飛舞スト云フモ可ナリ
景老グ戸隠マ詣レル道マ拾ヒ得タル天ノ懸館を見テ
「神さふる山の岩ゆえふく時ハこの塵をまづえち
ふらむ
正二位有功

斯ク主上マハ城山の公園マて烟花の御見分を濟せられ
還幸のとき善光寺をも御通覽あらせられ戒壇まで御馬車
にて着せ玉ひ櫻井社寺局長稻崎縣令の御先導マてその次
マ大本願の副住職並びハ大觀進住持波母某との御案内
マて佛像等を御一覽あらせられ此本願の副住職と申セハ大

欣御門の御娘マて伏見宮の御養子となりたまひ此寺に住
職せられ一ガ世マ類なき美人マてあわしままよ一供奉の
方々もこの御姿を見そなわ一互ひマ袖を引き合ふてゝ
る御方の如何なれば此山寺マあわせ一なごさ、ゆきあへ
りとりも此善光寺乃別當マ浄土宗となりま一天台宗とな
るハ浄土の方を大本願と云ハ天台の方を大觀進と云ふ然
れど此寺の佛寺となりたるハ鎌倉時代マ元ハ神社マて
申セバ諏訪神社の分家マて式内の神社なるよし何れの時
代にハ伊奈郡の本多善助グ悴善光と云ふ者ありて同郡よ
り寺を此地マ移一神社を以テ佛寺マ合併一たる者なるよ

江より拾ひ上りと云ふの甚しき妄説なりまゝ其ころに本
 多と云ふ姓もあるべき筈はなく善光と云ふ名もこの頃の
 風は非だ此寺の體に神社なりし事の種々の證據ありしと
 斯く翌十日の午前第七時長崎縣の行在所を御發轡して元
 善町を南へ大門町を東へ河原崎町より北へ進ませ玉ふ折
 くら傍に在る酒店の内より一人の男卒然立出で乗輿に向
 ひ何か暴言を吐く様子なれば東京より出張したる供奉の
 警部が走り出で直ち拘引したるよしまゝ善光寺より一
 里ばかり東北にて新町といへる處に學校の旗幾流れども

なく立で連れ生徒とればしき者の中男子の袴羽織またの
 洋服の揃ひまで出立ちまゝの中女子生徒の紫の袴な
 どとき思ひくは粧ひ道の左右に並列し御輦に向ひて拜
 禮せりそれより道も漸ひ平坦ならず九時をせぐる頃
 まへ坂を登りまた下りつ、田子と云ふ處に出で主上
 まもその民家にて御小休おらせられ夫よりまゝ坂道を登
 り下り賜ひて鍛冶お窪と云ふ處の峯の上にて御野立お
 り此處の東南を見いらして景色も殊さらよくそれより坂
 を北下り賜ひ平田と云ふ山里を過ぎさせ賜ふ折此邊の
 はや余ほどの邊僻なれば拜觀も出来るものも多くなれば

勝まて垢トみとる衣服などを被とる者澤山なれどもまた其
中よのよき衣被とる者もありて殊更娘などの上田織ま
の御召縮緬など着たるもあり髪かみの風なども東京を學とる
が自づから似つかわしく近とる西京大坂の女子等がや
らよ東京の真似をせりよりハ遙るに増しなりとみれハ
て置き十一時過るころ御輦みくらハ牟禮むれの驛やまに着せ賜ひ御晝
食も濟せられて十二時を過ぎ此處を御發轅はつせんあらせられ
是より以下越後路よ渡らせ賜ふの記事ハ第三号よ掲
て衆覽しゅうらんよ備ふ

御巡幸日誌第二号終

明治十一年十月五日出版

東海 北陸 御巡幸日誌 第三號

明治十一年第九月半禮より

金澤新田新津町まで

定價三錢五厘

明治十一年九月九日御届

編輯兼出版人

寺本彌太郎

第五大區十一小區
淺草聖天横町廿一番地

賣

淺草駒形町

兒玉又七

同馬道町三丁目

兒玉彌七

裏神保町

中村清兵衛

所

小舟町三丁目

熊谷庄七

御巡幸日誌 第三号

寺本彌太郎編輯

高山雲よ聳へ川源溪間を流るゝの様筆紙よ盡しぐさ風
 景の多く信州もあり聖上も同日(九月十日)十二時をき
 牟禮の驛を御發轅ありてより此邊の景色を御覽せられ敷
 御小休あらせられとり此邊の殊更山坂多く牟禮の驛より
 西の方へ入り小坂を越へそれより七八町の道程を経て小
 玉坂と云ふ處ありこゝの格別峻嶮よて二十町余も登ぼる
 ほどの難所なり然れど縣令はじめ凡て地方官の盡力よて
 御通御よ差支へるみと杯の更もなく午後一時頃難なく小

玉坂の嶮岨をも渡らせられたれより落影また大古間など
 云ふ村々を御通御よて一時半ごろ柏原の驛に着せ賜むぬ
 此邊のまて信濃の北えづれよて越後との塚ひなれば松
 ひなれども竹のなし名物の蕎麥はこの頃花盛りにて見渡
 す畑の恰も雪中は異ならぬ暫くよて此處も御立あり夫
 よりまた一里ほどの間へ漸々北へ下るところ多し野尻驛
 の高き原は學校生徒の宿まゝ旗を立て列ねて御通轡を待ち
 奉る野尻の寂寞たる山驛なれども芙蓉湖に沿ひての東
 まへ班尾山たみく嶺へ西北に近く飲綱山黒姫山立並び
 越後の妙高山を望み見るに空晴れ渡りよてさへ殊きらよ

空氣清鮮なるよと殆んど仙境に入る如くよてよて又
 御小休あり湖水に眺みたる人家を行在所となし賜ひ程な
 くよも立せ賜へは見送り奉る人々のなごり盡せぬ跡見
 坂下りつ上りつ供奉の方へや薄暮の頃なれば心も先きよ
 關川の橋うち渡る越後領着せ賜ふ行在所に相石新六郎か
 たなりよとぞ此處よて双頭龜を天覽よ備へたる者あり是の
 安政五年の頃捕へたる者なりよて程なく死しよりければ
 ろのまよて于よかためて密められたるを此度天覽よ備へよ
 ものなり斯て翌十一日午前第七時關川の行在所(相石新
 六郎)方を御發轡あらせらる此處の信濃と越後の塚よ在り

て妙高山の東の麓なれば水平より高きを凡る千二百尺ほどの地なり折かゝ山驛空濛として雨糸の如く殊も道路の深山幽谷の間よれば其日の御板敷にて御出門あらせられ程なく毛祝坂を登りて北の方より下らせ賜ふ爰は大田切小田切とて此道筋にて名だゝる難所あり此地より進ませ賜ふよ小田切の手前にて三曲りばかりの急坂を下りて又向ふの坂を登るなりその坂と坂との間は谷川あり水の色すこし黄白く水底の小石などいろの色みな白く思ふよ此小川の奥よある礫物の水の溶解して流れ出るなるべし硫磺などよゆあらんと思へど立寄りてとくと見極めとる

人もなきよ折かゝ風輦の坂を上り下り賜ふを見奉るよ錦旗のさひよ耀き佩玉琿々として儀衛雲の如くなれば賤山勝も老幼を携へて爰乃木がけ彼所の岩がねよ腰打ち風輦を拜し奉る二また村よて畑山三十郎方よて御小休あり關山驛よてハ村越伴次方よて御小休あり此驛も關川に齊しく茅屋兩側よ連なり僅らよ二百軒ばかりの山驛なれども拜見に出たる老若男女ハ夥しく羣聚し學校の生徒も白布よ校名を記したる旗を立て通御を待て拜禮せり是より坂を下り北へ向へは福崎片貝松崎など云ふ邊の近ごろ山も開け土地もよく屋並も至て見事なり夫より二本

(日四十月二十自月九)

木と云ふところなく松平彌助方に暫く御休息あり板橋と云ふ間の宿より樽本猿橋濁川など云ふ山里の村々より出たる拜觀の老若男女あまた羣れ集りて道端に跪づき拜禮せり夫より御輦の十一時すぎ新井に着御あらせられ東本願寺の別院にて御晝食を召上られ同日御發輦の頃ハ雨少し降り出したれど九時頃より止てまた午後に至り降り出し一時ころ新井を御立よなり了れより御輦を召せられ石澤と云ふ處まで御野立あり午後四時高田の驛に御着輦あらせられたり此處の行在所ハ中學校とさだめたる今宵ハそゆ日暮より雨のまぎと降り頻り物のあやめも定かなら

ず殊も秋乃仲ばなれば供奉の月卿雲客もいといぶせくて旅の宿りの慰さめかね都の空をうちながめかこち玉ふも道理なりまゝ今宵ハ行在所より近衛の儀仗兵と警視の諸士へのりの勤勞を思召され御酒肴料を賜りしなり此高田驛より去る戊辰の役は戦死しとる者の墳墓八百はありありこれに祭祀料として一人分金二十五錢づゝを賜り待從をしてその墳墓を吊らせられしと斯く翌十二日の午前七時三十分高田の行在所を御發輦あらせられし朝のうちに昨日の雨降りつゝきて未だ止まざりしも七時ころより漸く小雨となりしれば此驛の人々の勿論をちみちより出

來り御輦の通御を待て拜禮せり午後三時半ごろまいたり
柿崎の行在所は着御あらせり翌十三日の午前七時三
十分柿崎の行在所を御發輦あらせられり爰もまた越路
の一驛なれば拜見も出たる男女の人柄も賤しからず八時
半頃鉢崎は着玉ひ中山榮次郎方に御小休あり夫より
主上の御板輿に召せられ此邊の難所を過ぎ玉ひて午後四
時柏崎に御着輦あらせられたり翌十四日の午前七時柏崎
の行在所を御發輦となり市街を過させ賜ひて西北の方悪
田の原に出させ玉ふ此處の廣き砂原よて荒濱までの間別
よ見る者もなく荒濱の百軒程の漁師町よて是より椎谷ま

ての砂原の地多く椎谷の舊城下の地なれどもさして
繁華の處もあらず石地といへる所にて御晝食を召し上ら
れ夫より出雲崎は御着輦あらせられり此處の町の入口
より出口まで凡そ一里十八町程の所よて山に添ひ海は對
せる地よして行在所と殊も高き岡の上よ在りり光照寺と
いへる大寺なれば清涼よして且つ眺望もよろしく佐渡も
眼の當り見ゆる所なり午後四時頃出雲崎の行在所へ御着
輦あふせられたり翌十五日午前例刻出雲崎の行在所を御
發輦あり此日の雨降りて道もいと悪しく大和田といふ地
を過させ玉ふ此處の戊辰の年戦ひありり地とて御車の

(日六十月九)

うちより御覽あり寺泊の小學校にて御晝食を召上られ夫
より彌彦山の西南の方を東へ進ませ賜ひ竹華村より彌彦
山の東北なる麓村を経て彌彦神社の前なる五十嵐盛孝の
家を行在所と定められたり斯て翌十六日の午前七時件の
行在を御發轅あらせられ直ち彌彦神社へ參拜ありて幣
帛料並びに神饌料とも奉納あらせらる此神社の國幣中社
なれど越後の一の宮とて常々詣る人絶ることなく赤塚驛
にて御晝食を召上られみ、角田山の山脈外れにて眺望
尤もよく新瀉新發田三條もさ、一目に見渡さる此邊まで
の雨の名残の道いと悪く御轅の進みも遅ありしが新瀉近

(日七十月九)

くなりて道もいとよろしく五時をこ此地の行在所(白勢成
照方)へ着御あらせられと翌十七日の雨降りしきれど十
二時頃より行在所を御發轅ありて並木町住吉町など過さ
せ賜ひ新瀉縣廳へ渡らせ玉ふ縣令祝辭をさ、げ縣治のあ
りさまを奏上せらる、など例の如く畢て各課を御巡覽の
のち醫學校新瀉學校裁判所並びに博物館等ことく御
巡覽の後行在所へ還御あらせられたり翌十八日も御駐轅
の由なれば山形縣令三島通庸君の一日より天機伺と
て新瀉へ出張せられ何とぞ此度の御巡幸序は山形縣へも
柱げて御巡幸下さるべし一昨年も奥羽御巡幸と仰せ出さ

れながら羽前羽後の地を踏せ玉はず此度は是非とも風
 輦を促し玉へと人民は代りて歎願せられけれども何分よ
 も御都合あることとて其儀及べれ難き由なりければ責
 への人民の心を慰むる餘よとて佐々木一等侍補と西四辻
 侍従を御名代と遣わされ佐渡の國なる順徳天皇の茶毘所
 の跡を吊らひせ玉はんが爲は富小路侍従と加部殿夫の兩
 人を遣うわされしと翌十九日の午前七時二十分新瀨の行
 在所を御立ありてより信濃川の河岸まで御歩行めそはさ
 れ夫より新たにあらつらいとる龍船に移らせ玉ひ供奉の方
 とを始め警衛の武官に至るまで御陪乘あり水夫の白き筒

(日九十月八十月九)

袖の服を着しあまの襪をとり揃へてヤサホーエイヤと歌
 ひながら漕ぎ出せよ元より大川にてそ乃上此頃乃雨は水
 ましとれども御船のやがて沼垂乃濱まで着きたりける此
 處の人家はて暫く御小休あり夫より御馬車は召し玉ひ八時
 過ぎ御發輦おらせられ沼垂の一筋町を南と東と折れ曲り
 つゝ進ませ玉ふよとの人民も諸方より集り來りて御輦
 を拜し奉る折らら驛を出て玉へば東南の方の遙か興羽
 よ續きよる高山よ西南の方の稲田斗りよ處々の村落
 よ國旗の風は翻がへるを見るは目ざまき有様なり九時
 半ごろ海老が瀬と云ふ村を過ぎさせ玉ふよ此邊の田畑の

ほとりよ拜見の人々いと多く聚まれりまた阿賀の川と云ふ大河よて川幅二百四十七間にて岩代の國會津城の南の方より源を發し津川を経て流れ出る急流なり此處より九十五艘の川船を列ねての上は船橋を造りて渡り奉る此船橋の御板輿よて渡りせられ此橋の半より遙ろ見渡せば松が崎の北の方の小高き丘の上ありて殆んど仙境の如くなり尤も奇なるを此處の拜見人なり此船橋の上手は數艘の小船を浮べて御通轡を拜り奉れりまた川の東の新崎村よて十一時頃此處の近藤瀬平方へ着せ玉ひ御晝食を召し玉ふ此邊の梨子葡萄などのよく出來る土地なれ

は數多御買上げありよ是より又御車よて十二時過ぎ御立ちあり笠柳村を過ぎさせ玉ふ此邊の鴻巣熊谷の景色よく似たり夫より又新發田川よ沿ひて進ませ玉ふ會津山二王子山など云ふ山々も自ら御車を迎へ奉るが如くにて程近く見へ渡りて雨後の景色も殊よよろし此處の往來の道狭く右手の川なり左手の田よて拜見人の占むる地なけれは田の中は棧敷を造りの上は村々の男女居並び御通轡を拜り奉れりよ藤吉村弓越村など云ふ所を過ぎ玉ひて午後二時頃新發田よ入らせらる此處の鎮臺兵の驛外よ迎ひ奉り並列式を行ひ棒銃の禮をなして敬拜を夫

より兵營に入らせられ暫く御休息ありて營内處々を御巡覽あり畢て觀兵式ならびは練を叙覽あらせられ午後四時ごろ御着鞆あらせられたり此處の行在所も件の白勢成照の本宅なりかくて翌九月廿日の午前第七時三十分新發田を御發鞆あらせられ東京鎮臺分營兵隊伍を調へて驛外杉並木の處まで送り奉る五十公野と云ふ處より鳳輦を南の方へ進ませ玉ふは新發田の町より此邊まで拜見人の雲霞の如くは羣がりて野も山も田畑にも充滿して實は錐を立つべき地もなきほどなり夫より御輦の直ち西南のかとよ向ひて進ませ玉ふは東の五頭山又ハ出湯山とも

東山とも名づけて數里に亘りたる高山の麓は法正橋村と云ふ邊りより西の方にて小松など生ひしげりたる山ありて帶の如く東北より西南は續けりその山と東山の麓までの距離は僅か二三町ほどの間にて人家の竹木の間は散在し處々田畑ありて水清く山緑りなる風景は怡るも南山城より奈良へ出る處の景色は似たりよの邊りも遠近の村々より集り來りて拜見するもの甚だ多し九時ごろ荒川村の武藤徳四郎方より御小休ありしれより折居村女堂村中山村など過ぎさせ玉ふは此處もまた拜見の人々至て多く學校生徒も處々並列して御輦を拜し奉れりまた

西の方なる小山に此邊りまで来てあれよりの只東の方より高山あるのと三方に極目無際きまなくの平原へいげんなり上一分村の邊りてのみのみの節早稻せせいなを刈りて稻城いなぎは掛けたるも見へて田家の様も定めし面白く御覽せられしなぶん夫より堤村つゝむらまをぐり山などの村々を過ぎ玉ひて笹原町ささはらに入らせられ此處このところに山崎といふところを續きたる町にて殊の外賑はへる一ら小驛せうえきなりあらく十一時ころ山崎學校やまざきにて御小休ありそれより程なく御立ごたてにて川をさ上山屋など云ふ邊りの御聲ごこゑをはゆめて急いそがせ玉ふ赤水村須走村など云ふ村の田間の道を真西まにしに向て進ませ玉ふよみの邊りの彼の五頭山の正面

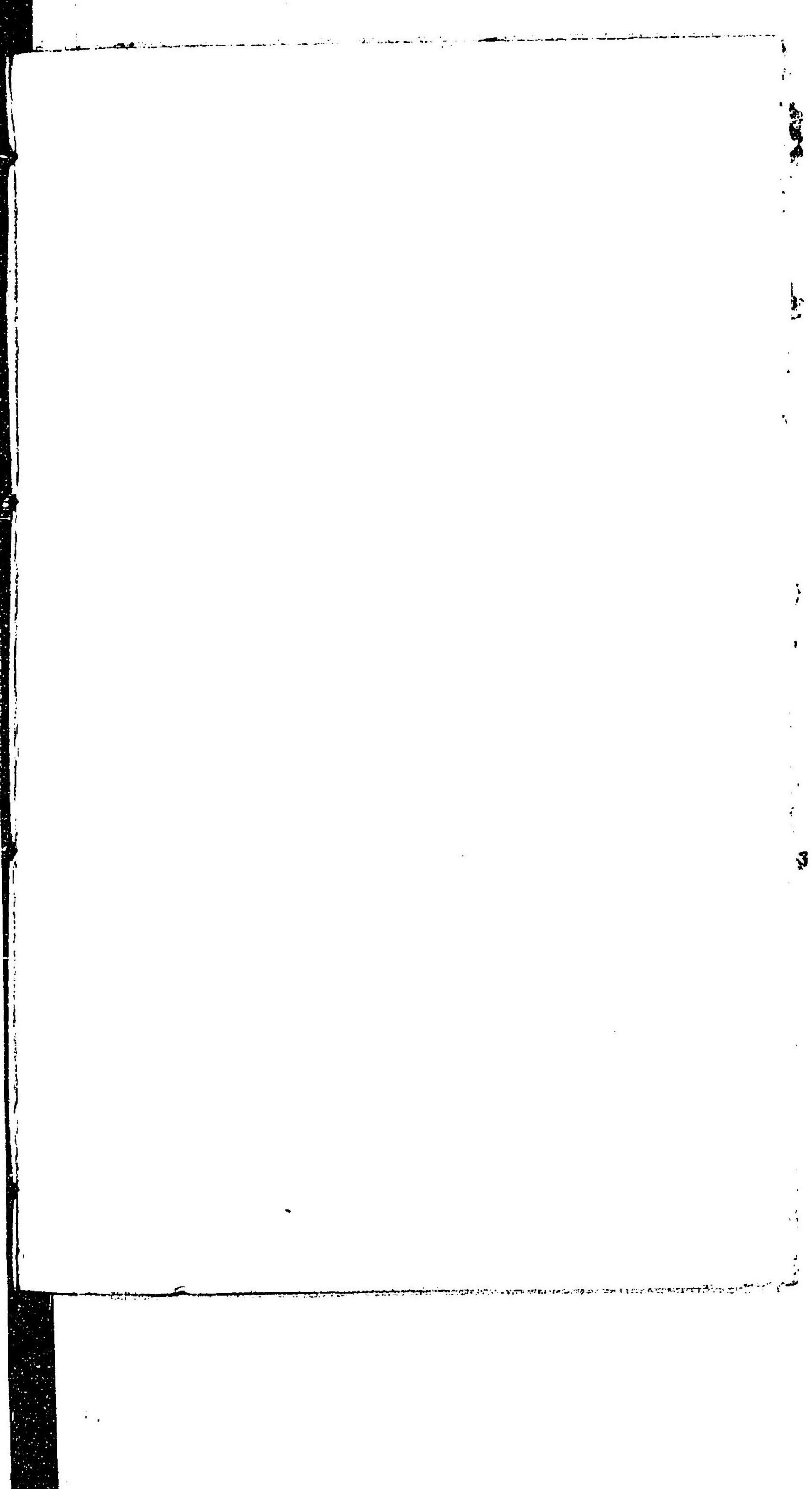
にて景色も殊に宜しく拜見の人々の次第は羣集し主上てんしやうは十二時ころ水原の御着替ごちかひをさせられ佐藤伊在衛門さとういざゑもんかとよて御晝食ごひるめしを召上らる一休この町を家並も大きく且つ美ひよしく豪商ごうしやうと思しき者多く見へたりまた驛外えきぐわいは山で御着ごちかひを迎ひ奉りし學校の生徒等も殊の外立派りつぱに見へ中は女生徒も多かりしが衣服髪いふくかみかたちと云ひその美麗なるみと是まで見たる類たぐひはあらざ程なく此ところを御立ありて中島百津等の村々を過ぎさせ玉ふ彌彦角田の山々もはゆ遠くとほなり申西の方まにしに當りて渺漠ひやうまくとりこの所にては分田村の石井孫太郎いしゐまごたろうかたよて御小休あり此邊りも随分拜見の人々

此處其處は透間もなく立ち羣がりたりるが中にも會津
 または津川あたりの在村々より出でたりと見ゆる者は旅
 装なるも少なからず暫くよしてまた此處を御立ち保田
 と云ふ村を過させ玉ひ阿賀の川に至り玉ふ此處も船橋な
 れは川端にて御野立ちあり是より御板輿にて此船橋を渡ら
 せられゆがて又鳳輦は移らせ玉ひ夫より御道筋の村々を
 御巡覽よて午後四時金澤新田を過させ賜ひ新津町の行在
 所(桂新吾)へ着御あらせられとり

是より先ハ第四号に記して近日刊行す

御巡幸日誌第三号終





特44
720

006292-000-4

特44-720

北陸東海御巡幸日誌 第1-3号

寺本 弥太郎/著

1册

M11

ACJ-0414



特 44

720

東 京 圖 書 館

函 五 二	門 新
-------	-----

架 四	部 十
-----	-----

號	類 二
---	-----

東 京 圖 書 館
新 門 十 部
二 五 函
二 類
四 架
號